

五常

編集発行
コミュニティ協議会
広報委員会

防災特集
地震への備え

防災特集 地震に備えましょう

東日本大震災から3年、ニュース映像等から受けた衝撃や悲しみが少しずつ薄れています。今一度、地震への備えを点検し、命を守っていただくため、これまでの広報で特集した防災記事をまとめました。

2011年3月11日の東日本大震災や1995年1月17日の阪神・淡路大震災が私たちに与えてくれた多くの教訓を今一度振り返り、地震災害などへの備えを確実にすることが被害を最小限にすることにつながります。

枚方市でも地震はある

枚方市には生駒断層帯に属する7つの活断層が確認されており、五常校区の近くにも枚方撓曲（とうきよく二断層）と呼ばれる活断層が屈曲している部分と呼ばれる活断層があります。生駒断層帯地震が起きると、枚方市では



震度5強以上で、約4万2千棟の建物が全半壊し死傷者は約5千5百人、罹災者は16万人を超えるると予測されています（枚方市地域防災計画）。近畿地方南方の太平洋海底を震源とする東南海・南海地震はいつ発生してもおかしくないとされています。

頼れるのは自分、家族、近所

地震などの大きな災害では役所や消防・警察なども被災することから、消防隊などの公的な救援活動はどうしても遅れます。

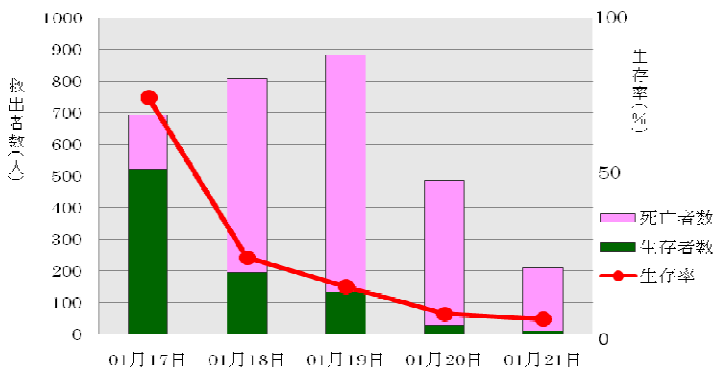
阪神淡路大震災において、家屋の倒壊などによって生き埋めとなり、その後救出された生存者のうち、出動した救助隊に救出された人はわずか2%にすぎません。多くの人は自力または家族や隣人などの地域住民によって救出されました。

生き埋めや閉じ込められた際の救助

誰が	割合 (%)	自助・共助・公助の別
自力で	34.9	自助 66.8%
家族に	31.9	
友人・隣人に	28.1	共助 30.7%
通行人に	2.6	
救助隊に	1.7	公助 1.7%
その他	0.9	

(日本火災学会：1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書)

救出者中の生存者の割合の推移



また、右の図のように、救出者中の生存者の割合は時間とともに小さくなり、震災当日（1月17日）は約75%、2日目は約24%、3日目は約15%、4日目には約6%と激減したことが報告されています。救出者のピークは3日目ですが、生存者は当日が最も多かったのです。

これらのことから、被害を最小限に抑えるためには、地震災害が起きたあとの早い段階、まだ公的な救援活動が

十分ではない段階での救助が不可欠であることがわかります。
大災害が発生したら、自分の命は自分で守る「自助」の行動や自分たちの地域は自分たちで守る「共助」の取組みが大変重要です。災害発生時に頼りになるのは自分、家族、近所の人、地域の人のことです。

自助・共助・公助って？

◎自助 (じこよ)
「自らの安全は、自らが守る」これが、防災の基本です。

自宅を安全な空間にすることは自分にはできないことです。地震の揺れの中で自分の身を守ることや、揺れがおさまったとき、自分の目の前には火災を最も早く消すことができるのは自分です。



けがをした家族の出血を、最も早く止血できるのは自分です。
自分の手で、自分・家族・財産を助ける備えと行動を自助と呼びます。

◎共助 (きよじょ)
「わがまちは、わが手で守る」これが、地域を守る、最も効果的な方法です。そして、地域を守ることは、自分を守ることです。



地震の揺れがおさまり、自宅が無事であったとしても、隣の家から出た火を放っておけば、自分の家も燃えてしまいます。隣の家の火も消すことが、自分の家を守る、唯一の方法です。
自分が生き埋めになったとき、それに気づき、救出活動を始められるの

は誰でしょうか？

震災のような広域災害では、警察や消防なども、同時にすべての現場に向かうことはできません。被災地の外からの応援の到着には時間がかかります。近隣のみなさんが救出してくれるのを待つほかありません。救出活動も消火活動も、早く始めるほど、そして、多くの人が参加するほど、被害を小さく抑えられます。

災害時に円滑に協力するためには、ふだんからの交流が大きな力になります。こうした、近隣のみなさんと協力して地域を守る備えと行動を、共助と呼びます。



災害の発生からできるだけ早く、すべての能力を応急対策活動にあてられるよう備えています。

自助・共助・公助の連携

震災の直後、自分を守るのは、自助の力です。

自分ひとりでは対応できない状況になったとき、頼ることができるのは、共助です。それは同時に、自分が可能ならば共助に参加する意識が前提となります。

公助が活動を始めても、その援助の手が、円滑に私たち一人ひとりに届くためには、共助との連携が効果的です。こうした連携が、地域、そして自分の被害を最小限に抑え、早期に復旧・復興するために必要なことです。

自主防災組織

いざと言う時の助け合いのためには、日頃からの交流が大切です。お互いの顔を知っていることが安否確認の基本となります。

各自治会や理事会に防災担当や、防災担当部会があります。これが最も基本的な自主防災組織であり、共助の担

◎公助 (こうじょ)

市役所を始め、警察・消防・府・国などの行政機関、電気やガス、交通機関などのライフライン各社を始めとする公共企業、こうした機関の応急対策活動を、公助と呼びます。各機関とも、

い手です。

さらに、校区全体の共助を推進するための組織として五常校区自主防災会があり、校区内の5カ所に防災倉庫を設け、防災用備品を保管しています。

また、毎年「防災フェスティバル」や防災会議を開催して、みなさんの防災への関心を高め、自分の身は自分が守るための行動の普及に努めています。

自宅を安全な空間に

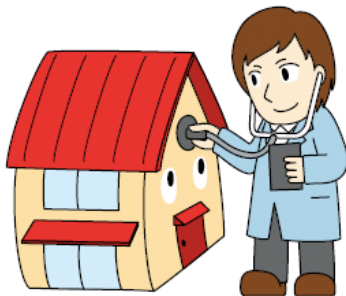
阪神・淡路大震災では、犠牲者の83%が家屋の倒壊や家具類の転倒による窒息死・圧死であり、87%の人が自宅で亡くなりました。地震対策で、最優先で考えるべきことは「我が家で死なない、大怪我をしない」ことです。我が家を安全な空間にすることは自分にしかならないことです。自分の手で、自分・家族・財産を守る備えを行いましょう。

我が家は地震に

耐えられる??

阪神・淡路大震災では、倒壊した建物の90%以上が昭和56年6月より前

に建設されたものといわれています。建築から相当の年数が経過している住宅や、古い耐震基準で建てられた住宅は、地震が発生すると倒壊するおそれがあるので、耐震診断をして、もし弱いところがあれば補強するのが基本です。



枚方市では、住民が自宅の耐震診断・改修を行いやすいように、費用を補助する制度を設けています。木造住宅は耐震診断費用の90%以内、非木造住宅(マンションを含む)は50%以内が補助されます。耐震診断により耐震改修が必要とされた建物の補強工事にも補助制度があります。これらについて詳しくは枚方市建築安全課(電話072(841)1221)にご相談ください。

なお、枚方市などの行政の名をかた

り、耐震診断や改修を勧める個別訪問が行われているとの情報もありますので、十分にご注意ください。

我が家を安全な空間に

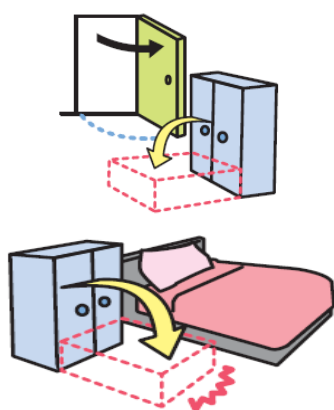
◎家具の転倒防止

家具が地震の時に倒れないように固定したり、高い所から物が落ちてこないようにすることは、命を守るための最低限できる対策でしょう。「固定の仕方が分からない」とか「家具に傷をつけたくない」と言う方もおられます。自分や家族の命がかかっているのですから、分からなければ分かる人(市役所など専門家)に聞けばよいのです。大切な家具に傷を付けたくない気持ちも分かりますが、命とどちらが大切なのでしょう?



家具の転倒防止のために、すぐに出来る事は、重いものを下に置き、新聞紙等を家具と床との間の手前の方にはさむことで、重心を下げる(ことです)。(確実です)。

◎家具の配置で安全を



「寝室に家具を置くな」とはよく言われています。確かに、寝ている所に倒れてくるような家具は置かないことが大切ですが、1m程度の背の低い家具は、天井などが落ちてきたときに、生き延びるための空間を作ってくれる可能性が高いとも考えられています。寝室の状況に応じて検討しましょう。また、倒れたら部屋の出入口を塞ぐことにも必要です。

家族間の連絡方法や

避難場所を確認

地震はいつ起こるか分かりませんが、家族がバラバラの場所で被災しても「あそこに行けば必ず家族がいる、あそこには逃げているはず」という信頼感があれば、いざと言う時に迷わず行動できます。そのためにも家族の間で、万一の場合の避難場所等について繰り返し話し合っておくことが大切です。



災害発生時には電話がかかりにくくなる状況になります。家族で話し合っ、遠隔地の親戚や知人を安全確認の連絡先しておくことも工夫の一つです。被災地への電話がつながりにくくなった場合には「災害伝言ダイヤル171」(忘れてイナイ(171))と覚える)が提供されます。毎月1日と15日など体験利用日も設定されています。

詳しくはNITのホームページ等で確認してください。

非常時のための防災用品

防災用品は大別すると「非常持ち出し品」と「非常備蓄品」に分けられますが、地震は突然やってくるので、外出先で被災する可能性もあり、「平時の備え」も大切です。

「**平時の備え**」といっても特別なものではなく、普段も役立ち、持ち歩けるもので、持っているとう安心できるもの、最低限必要なものを自分の生活に合わせて考えてみてください。例えば携帯電話と電池式の充電器、小型の懐中電灯、笛(助けを呼ぶときに役立つ)、飲み物、チョコレートなどの携帯食、冬なら使い捨てカイロ、ポンチョや雨合羽があれば役立つそうです。



「**持ち出し品**」は被災した当日、身の安全を確保するための最低限の備えで、自分で持てる範囲でリュックなどにコンパクトにまとめ、玄関や寝室な

どの持ち出しやすい場所に常備します。

「備蓄品」は、電気、ガス、水道な

どのライフラインが断られた中で数日間をしのぐために必要なものです。とりあえず最低限の生活ができるために必要なものを考えてみてください。水、食料品のほか、みんなに共通するものとして、排泄のための携帯用簡易トイレ、情報を得るための携帯用ラジオ(電池の予備)も大切です。



備蓄品は台風や体調を崩して外出できないときにも役立ちます。そのような機会に備蓄品を活用して非常時の暮らしを体感し、備えを確認、充実させることもできます。

必要な防災用品は一人ひとり異なります。防災関係の資料や新聞などに載っている「防災用品一覧」を参考にしながら、我が家(自分)には何が必要かを自分で考えて、準備することが大切です。

地震の心得八か条 (千葉県防災ポータルサイト)

1. 耐震化 家具を固定し ひと安心
2. 自宅にも 勤務先にも 水食料
3. 日ごろから 家族で確認 避難場所
4. あ!地震 まず身の安全 つぎ消火
5. 助け合い 隣近所で 救出救護
6. 落ち着いて むやみに動かず 情報把握
7. 171 伝言板で 安否確認
8. 避難前 ガス栓・ブレーカー 確かめろ

編集後記

記事の作成にあたっては、千葉県、東京都渋谷区、坂出市のホームページを参照しました。イラストは内閣府の「みんなで防災のページ」及び枚方市自主防災組織ネットワーク会議が作成した自主防災組織活動マニュアルから引用させていただきました。(M)

